

JOMF 派遣医師便り (2014. 10)



必ず抗生剤を使用しないといけません！

マニラ日本人会診療所

菊地 宏久

33才の若いフィリピン人女性が心不全で亡くなりました。小児期に罹ったリウマチ熱（溶連菌感染症後の自己免疫反応によると考えられています）のために重症の心臓弁膜症を併発していましたが、心不全が悪化し突然の呼吸困難に陥り亡くなりました。今日は抗生剤を必ず使用すべき病気、リウマチ熱についてお話します。

この女性はレイテ島タクロバンに住んでいた方です。昨年巨大台風 Yolanda により町中が流され、常薬としていた心不全の薬が全く手に入らなくなりました。被災後に妻とタクロバンを訪れたとき、被災した病院の集中治療室で初めてお会いしました。聴診すると僧帽弁狭窄症と大動脈弁閉鎖不全症の心雑音が聞こえました。横になっているのが辛くいつも起座呼吸の状態でした。酸素吸入をしても効果が十分ではありませんでした。病院で保存的治療を受け、その後自宅で療養していましたが、病態が悪化し一カ月後に急変されました。

台風は社会環境を一変させたばかりでなく、病気に悩む患者さんたちの命も奪っていきましました。

リウマチ熱はA群β溶血性連鎖球菌感染症(溶連菌感染症)による上気道感染が治った後、2~3週間後に突然の高熱で発症します。溶連菌感染症後の自己免疫疾患と考えられています。小児に多く、心臓弁膜症や全身の関節痛、皮膚に紅斑が起こります。手足が勝手に震える舞踏病症状が起こることもあります。心臓弁膜症が起こると聴診で異常な心雑音が聞こえるようになります。心臓病症状としては息切れや動悸、浮腫などが起こってきます。今回のタクロバンの女性のように病態が進行すると命にかかわることもあります。

では、どのようにすればリウマチ熱の悪化を少しでも減らすことができるのでしょうか。一言でいえば“長期の抗生剤を使用すること”です。

リウマチ熱は再発しやすいため感染源となる副鼻腔炎、扁桃腺炎、虫歯などを治療することも大切です。心疾患症状が出た場合には日常生活を含めた運動制限が必要となります。溶連菌感染症に罹った既往がある場合には、主治医に経過を説明することも大切です。皆様お体大切にしてください。